自律を決意し、小さくても輝く自治体めざす赤井川村

竹田村長―栄村などフォーラムに4回参加
スイートコーンもぎ、農業体験ツアー4600人

両親を連れて村営温泉、つけものがおいしい。
小さい町村で一生懸命努力している　―紙さん

19町村で市をつくってもいい

紙　いま、小さな自治体が住民自治を守るため、自立・自律をめざして全国でがんばっています。後志管内の赤井川村（竹田和晃村長）もその一つ。日本共産党の紙智子参議院議員が現地を訪ねて、地方自治のこと、農業のこと、合併のことなどについて、竹田村長とざっくばらんに意見を交わしました。

紙　新年あけましておめでとうございます。

竹田　おめでとうございます。

竹田　紙さん、うちの村のことは知らなかったでしょう。（笑）

紙　いえいえ、ときどき両親を村営の温泉につれてきています。両親は、とてもあったまっていいと。それとつけもの食堂がありますよね。つけものが好きなものですから買っています。本当に色々なことをやられていて、がんばっている村だと思っていました。

竹田　合併問題で議会から「合併しない」との議決をいただきまして。自律構想を議会に出しておりました。おかげさまでご了解をいただきました。

紙　歴史的なときですね。

竹田　はい、うちの村はカルデラ盆地の中にありまして、四方を山に囲まれております。となりの余市町まで冬に除雪ができたのは、昭和三十八年からです。小樽にぬける道路は平成三年まで冬の間は通れませんでした。うちの村はそういう陸の孤島だったわけです。

僕は逆に、愛着が強いと思うんです。だから村民の方々に理解していただくことが必要なものですから、村のことや合併のことが分かる手際な資料を出してきました。それを元に判断されたと思います。

紙　全国の市町村から集まってきて、武道館で集会をやり、それから、各国会議員さんへの働きかけということで、私の部屋にもよく北海道の自治体のみなさんもこられて話していきます。

そこでは、国の方が当初いっていたことと違うのではないか、と。やっぱり自立の道たとか地方の権限をもっと大事にするということがいわれてきたけれど、実際には、結局一つのところに押し込めていこうという方向にきているのではないか、と話されます。

竹田　僕は地方自治の問題では、いろんな議論がでてくると思うんですが、後志管内に十九町村があって、十一万人の人口がある。僕は十九町村で市をつくってもいいのではないかと思っています。

十九町村に、住民投票で区長を決めると、その区長には予算提案権と予算執行権を与える。予算提案権と執行権さえあって、住民みんなで協議をして、そして納得して執行するのであれば、議決権を離したからといって、自治を捨てたことにはならないな、と究極の選択をしています。

フォーラムは勉強になりました

紙　蘭越町で十一月十三日に「小さくても輝く自治体フォーラム」をきいて、そこに、道内四十三自治体から三百人を超える人が集まったと聞いて、いきたかったな、と思っていたんですけれど。

竹田　私も蘭越の宮谷内町長さんから、「竹ちゃん、後志からだれもいかないというわけにはいかないから、おまえ十五分から二十分しゃべれよ」といわれました。腹をくくって参加しました（笑）。

紙　やっぱり他のところと交流されて、生かしていければいいと思うんですが。

竹田　僕らも本当は不安なんです。みんなよりもとんでもないことやっているんではないか、と思われる不安を感じていたわけです。

そうしたら栄村から今回の群馬県上野村と四回でしたけれど、町長さんたちは、みんなピンと一本筋を通していらっしゃる。僕は勉強になりました。

地域の資源を生かしてこそ

紙　以前、全国町村会が出した二十一世紀に向けたアピールがあって、農山村がどんな大事な役割を持っているのかを、「生存を支える」、「国土を支える」、「文化の基層を支える」、「自然を活かす」、「新しい産業を創る」という五つのテーマでずっと提言されています。本当に一致すると思いました。

いま、小さなところでも一生懸命努力されているところがあって、私もいくつかいってきて、非常に感銘を受けているところがあるんです。一つは北海道でいうと、下川町です。

町長さんがお話されていたのは、山間の町で、こんなアクセスの悪いところに企業なんか誘致されない。それなら自分たちのもっている資源を生かして本当にわけがありません。本当に村にある地域資源を大事にしなかったら、上滑りしちゃいますよ。

紙　赤井川村ではどんな苦労をされているのですか。

竹田　苦労とかじゃなくて楽しいことです。うちの村は前任の首長さんのおかげで、いろんなご意見をいただいたんですけれども、キロロリゾートが平成三年にオープンしました。

赤井川の七割は国有林があるわけですから。その国有林を活用した新たな産業ができないかな、ということで実を結んだのがリゾートだったと。

いま、赤井川村は色んな作物をつくっているんです。春のアスパラからはじまってイチゴ、スイカ、メロン、スイートコーン、トマトが入って馬鈴薯、カボチャ、お米と。この五百人くらいの中でそれだけ色々な作物をつくっています。

東京から一泊二日でキロロに泊まって、赤井川村でスイートコーンを三本から五本もいで、そしてまた戻るというツアーをやって七百人が来た。それで東京のツアー会社が、これは新しいツアーになるな、ということで、その年の秋からグリーンアスパラとスイートコーンと馬鈴薯と、農業体験ツアーの企画をしたんです。四千六百人が来ました。

紙　私はこのまえ群馬県の甘楽（かんら）富岡というところにいってきたんです。それでびっくりしたんですけれども、あそこでは百八品目です。

竹田　百八品目とはすごーい。

紙　びっくりしたのは甘楽富岡の農協と生産者がしっかり手を結んでいること。いま、営農指導が薄くなっていますが、そこでは、逆に営農指導を強めていて、三十数人体制から五十数人体制に専門家を配置し、一年三百六十五日のうちに二百数十日間は交流したり勉強したりしていました。

そうしたら二十歳から八十歳までの人で、自分は大根をつくるとか、アスパラをつくるとかやっていまして、販売して利益がある、そこから配分される利益が一番いくのは生産者のところにいきわたるようになっています。農協の利益は少ないのですが。

竹田　でも農協の原点ですね。だけど北海道の農協は合併、合併で営農指導がどんどん脇が甘くなっているような気がします。

農家の高齢者の話で、僕は一つ面白い発見がありました。

今年、うちの村も下水道の整備が終わったんです。たまたま高齢な農家さんだったので、下水道事業はやらない、と。息子さんが帰ってくるとなったら投資するけれども、何十万もかかるものですから。仕方ないね、となったんです。そこにツアーさんが入った。

ある晩、僕の家に急にやってきたんです。お酒を飲んでね。最初は、何か、うちの職員が迷惑をかけて怒られるのかな、と思いました。そうしたら「村長、じつは下水道のことなんだけど、俺加入したいんだ」というんです。

どうして、と聞いたら、「うちのトイレぼっとんトイレだから使ってくれないんだ」と。「ツアーの人にトイレだけあそこにいってつかってくれ、とはいえないんだ。せっかく来てくれるんだから、気持ちよくつかってほしい」といいまして、こちらとしては「どうぞ加入してください」となりました。（笑）

紙　それはそうですよね。来てもらったら、ね。（笑）

竹田　僕は人間としてていろんなことに絡んでいると、年齢のことはあるけれど一緒にやってくれると思っています。手間暇はかかります。非効率でもそういう取り組みは小さなところでなければできません。

いまはいろんな取り組みをやってチャレンジしているところですけれど、将来は赤井川で農業やっているから食べていけるといってくれればいいなと僕は思っているんです。

（次号につづく）

赤井川村村長
竹田　和晃さん
2005年新春
なごやか対談
紙　智子さん
日本共産党参議院議員

【略　歴】

竹田和晃（たけだかずあき）。1954年生まれ、50歳。赤井川村職員を経て1999年から現職。

紙　智子（かみともこ）。1955年生まれ、49歳。日本共産党北海道委員会常任委員などを経て、2001年から現職。